



150年前の姿を今に伝える「石垣の里」 先人の思いを未来へつなげたい

先人が幕末から明治にかけて作り上げた石垣を次の世代につなごうと活動する「外泊いしがき守ろう会」。会長の吉田清一^{せいち}さんは、独学で石積みの技術^{せいき}を身につけ、40年にわたって石垣の修復を行ってきました。

①

①「石垣の里」と呼ばれる愛南町外泊地区。北西の季節風から家や暮らしを守るために築かれた石垣が独特の景観を生み出しています。②石垣の修復作業を行う「外泊いしがき守ろう会」会長の吉田清一^{せいち}さん（右）と愛南町観光協会の梶谷良文^{らぶん}さん。観光協会では景勝維持活動の一環として石垣の修復作業や草刈りを手伝っています。③石の形を一つ一つ確かめながら積み上げていく吉田さん。「ここがダメならこっちで使おう」パズルを楽しむように試行錯誤を繰り返します。



石垣の里

愛南町外泊地区。権現山の北の斜面に切り開かれたこの小さな集落は、強い季節風から家を守るために石垣が作られ、それが独特の景観を生み出して「石垣の里」と呼ばれています。

現在、37世帯約80人が暮らす外泊地区。整然と積み上げられた石垣は、高いものでは7mを超えています。

数十年にわたる開発

外泊は、もともと隣の中泊地区の二男、三男の分家問題の解決として、開発されたと言われています。幕末から明治にかけて数十年にわたって山肌を開墾し、出土した自然石で段畑とともに石垣を作り上げました。石垣は、本家にあたる中泊をまねて築かれました。その後、中泊では大正末期から始まった家屋の改築に伴ってほとんどの石垣が取り除かれましたが、中泊より季節風の強い外泊では取り除くことができず、その多くが当時のまま残っています。

④数多い外泊の石垣の中でもひとときで見事な七蔵垣。初代移住者の吉田七蔵さんが17歳のときに築いたと言われ、築いた人の名前が残っている唯一の石垣です。⑤⑥「外泊いしがき守ろう会」が毎年3月上旬から4月上旬に開催しているだんだん雑まつり。⑦⑧だんだん雑まつりの準備を行う「外泊いしがき守ろう会」の人たち。今年は270人の石雑アーティストから届いた石雑を一つずつ丁寧に配置しました。

外泊いしがき守ろう会

先人が作り上げた石垣を次の世代につなごうと10年前に地元の人たちによって結成されました。会長の吉田清一さんを中心に10人のメンバーが、崩れた石垣を修復したり、段畑の草刈りを行っています。

春には「だんだん雑まつり」と「石垣の里イルミネーション」を開催、手作りのイベントが集落の風土とあいまって、毎年、訪れた人を楽しませています。



石垣の里で、
創造性あふれる石雑を楽しむ。



光の装飾できらめく石垣 「石垣の里イルミネーション」 開催中

4月3日(火)から5月7日(月)まで毎日、外泊地区で「石垣の里」イルミネーションを実施しています。この時期だけの幻想的な里の風景をぜひご覧ください。



石垣と向き合う

150年前の姿を今に伝える「石垣の里」。その景観を維持していこうと10年前に結成されたのが「外泊いしがき守ろう会」です。会長は、吉田清一せいいちさん。吉田さんは、外泊地区で民宿を営むかたわら、40年にわたって石垣の修復を行ってきました。吉田さんが石垣の修復を始めた40年前、すでに集落には石積みができる人はいませんでした。「水が出て崩れた石垣がそのままだったり、段畑が草に覆われたり、景観は悪くなる一方。どうか石垣を修復したい」そう考えた吉田さんは、自ら石積



先人の思いを少しでも未来につなげることが
できたんじゃないか、そう考えると達成感があるね

吉田 清一
(よしだ・せいいち)

1954年生まれ。
外泊いしがき守ろう会会長。
外泊で民宿「石垣荘」を営む一方、40年ほど前から石垣の修復に取り組む。修復を始めた当時、すでに集落に石積みをする人がいなかったため、独学で石積みの技術を身につけた。

①一昨年の大水で崩れた石垣。石垣は、水が出たところだけでなく、周りも大きく崩れました。②修復後の石垣。「石垣学校」のメンバーと共に吉田さんが修復しました。もともと石垣の中段にあった2つの大きな石の1つを根石、もう一つの石は砕いて、吉田さんの遊び心で築山が作られました。③修復が終わり、蘇った石垣を見上げる吉田さん。先人が築いた石垣を修復することで、過去と現在をつなぎ、未来をも見据えています。



崩れた石垣



修復された石垣



みを始めます。しかし、周りに教えてくれる人はいません。先人の積み方を見て勉強したり、何度も石を積み変えたりして、独学で石積みの技術を身につけたのです。

蘇る石垣
先人の思いつなげる

今年に入って吉田さんは、石積み技術の継承と石積みの修復に関する活動をしている団体「石積み学校」*のメンバーとともに、一昨年に崩れて手付かずだった高さ3・5mの石垣を修復しました。

4日間滞在したメンバーが帰ったあと、吉田さんは最後の仕上げを行いました。脚立と脚立の間に通した足場板の上にあらかじめいくつもの石を乗せておき、それをおもむろに持ち上げて、石垣に組み込んでいきます。ここがダメならこつち、この角度で会わなければ回してみ、時にハンマーで石を割って形を整え、瞬く間に頂上まで積み上げました。

「石積みは、積み木のように崩れないように高く高く積んでいく作業の延長。簡単と言えば簡単だが、崩れにくく積むのが

難しい」という吉田さん。「先人が積んだ石垣は、なんとなく積んでいるようで綿密。高い技術が地震や水害に強い石垣を支えている」と先人の仕事に思いを馳せます。

修復が終わった石垣を見上げ「先人の思いを少しでも未来につなげることができたんじゃないか、そう考えると達成感があるね」と話す吉田さん。その顔には、誇らしきとも安堵とも見える表情がありました。

石垣の里

だんだん館

外泊地区を上がっていくと、憩いの場「だんだん館」があります。眼下に広がる宇和海を望みながら一休み。石垣の里の昔懐かしい写真や版画作品も展示されています。予約をすれば郷土料理も食べられます。



営業時間／8:30～17:00
定休日／毎週火曜日
だんだん館 0895-82-0311

町公式フェイスブック
で吉田清一さんのインタビュー動画を公開中



愛媛CATV制作
「石垣の里」はこちらから



*「石積み学校」は石積み技術の継承をしながら石積み修復の手伝いをするという活動をしている団体。石積み技術を持つ人・習いたい人・直してほしい田畑を持つ人の3者のマッチングも行う。